

リマ・バレット「ガブリエラの息子」⁽¹⁾ (翻訳)

岐部 雅之

解題

ブラジルでは一八八八年に奴隷制度が廃止され、白人も黒人も、さらには混血を含めたそのほかの人種も分け隔てのない「平等な社会」で暮らすことになったが、それはあくまで建前上の話であり、自由な身分を得た元奴隷の生活はむしろ厳しいものになった。今回翻訳する短篇「ガブリエラの息子」(O filho da Gabriela, 1906)の作者リマ・バレット (Lima Barreto: 1881-1922) は黒人奴隷の血を引く両親のもと、当時の首都リオデジャネイロ市で生まれ、七歳の誕生日(五月十三日)に奴隷制廃止を迎えている。つまり、負の遺産を引きずりながら近代化の道を歩み始めたブラジル社会を間近で見ながら成長した作家であり、長篇小説やクロニカ(新聞時評)など数々の作品で、社会のひずみに翻弄される黒人たちの理不尽な境遇を描いたことで知られている。

こうしたブラジル社会のネガティブな一面は二十一世紀の現代においても大きく変わったとは言いがたく、近年ブラジル文学界で注目を集めているアフロブラジル作家の活躍が図らずもこのことを証左

している⁽²⁾。その中の一人であるイタマル・ヴィエイラ・ジュニオール (Itamar Vieira Junior: 1979-) は、同国の権威ある文学賞をダブル受賞(ジャブチ賞とオセアーノ賞)した『曲がった鋤』(Torto arado, 2019)⁽³⁾で、奴隷身分ながらの黒人女性を主人公に据えて、奴隷制度の負の遺産が過去のものではないことを生々しいまでに訴えた。驚くべきことに、作品の舞台は二十世紀後半のサトウキビ農園である。

ここに訳出する「ガブリエラの息子」でも、やはり社会的弱者である黒人の親子(ガブリエラとオラシオ)を中心として、彼らを取り巻く厳しい生活環境が見取れる。物語は女主人ラウラと使用者ガブリエラの激しい口論から始まるが、息子を病院へ連れて行くこととする使用者に対して、女主人は「こっちが何のために使用者を置いているのかわかってるの」と立場(権威)の差を遠慮なく振りかざす。その後、ガブリエラは息子を連れて出て行くものの仕事は見つからず(彼女は読み書きができないため、誰かに広告を読んでもらうしか情報を得られない)、結局はラウラの家に戻って料理人を務めることになり、息子が六歳のときに死んでしまう。黒人の、さ

らに女性の生きる選択肢がいかにか乏しいかを暗示しているかのようである。

そのままラウラの家で育てられる息子オラシオもまた、あるとき主人であるカラッサ顧問の指示に反発して、「この恩知らずが！」と怒鳴られる。もともと情緒不安定だったオラシオはこの一件のあと、学校へ行くものの体調を崩して早退すると、薄れゆく意識の中で意味不明な言葉をラウラに呟きながらぐったりする。この最後の場面におけるオラシオの狂気じみた言動は、言わずもがな社会のひずみに苦しむ黒人たちの悲痛な叫びの表れではないだろうか。また、オラシオを診断した医者が薬を飲ませておけばすぐに快復すると鷹揚に語る様子は、黒人の境遇を顧みない権力者側の無知を皮肉るリマ・バレットらしいユーモアであり、読者は思わずにやりとさせられるのである。(解題おわり)

「ガブリエラの息子」

アントニオ・ノローニヤ・サントス⁽⁴⁾に捧ぐ

「あらゆる進歩の源に失敗がある。

ただし、その失敗にこそ価値がある」

ギユイヨー⁽⁵⁾

「こんなこと続けるわけには行きませんよ、絶対に。度が過ぎるで

しょう。一日中じゃないの」

「でも奥様、息子のことなんですから」

「だからどうしたって言うの。あなたたちの子どもときたら最近はお賢い。世話をしてもらったり、病気になるったり……。よくお聞き。明日は出かけてもらっちゃ困りますよ」

「でもラウラ奥様、あの子は良くなってきました。お医者様だってちゃんと見せるようにとおっしゃっているし、明日は……」

「明日はだめだって、何度も言わせないで。うちの顧問は学校に早く行かなきゃならないし、試験もなさるから、お昼は早めに済ませないといけないのよ。明日は行ってもらっちゃ困ります。こっちが何のために使用人を置いているのかわかっているの。明日は出かけてもらっちゃ困りますからね」

「いえ、行かせてもらいます。何をおっしゃるかと思えば、うちの子に死ねとでも言うんですか。そうでしょう、どうでもいいと思っ

ていらっしやるんですね」

「何ですって？ もう一度言ってごらんさい」

「申し上げたとおり、行くと行かせたら行かせてもらいます」

「図々しいわね」

「図々しいのはそちらでしょう。私が知らないだけでも……」
それから二人は少しばかり黙り込んだ。繊細な美しさと大理石のように若々しい肌をした気高い女主人は、すっかり青白くなった薄い唇を半開きにし、真珠さながらの白い歯を噛みしめて怒りを露わ

にしていた。気が動転して顔色が変わった使用人は、茶色の悲しい目にきらりとした鋭い光を灯していた。やがて堪えきれなくなった女主人は表情を歪めると、体を震わせて突然泣き出した。

使用人の無礼な言動、結婚生活への失望、理想の恋人に関わる苦い記憶も癒えず、運命に引きずられてきた。心に潜む憂鬱で波乱万丈の人生には上手に掬いきれなかったものしかなく、網に絡まって揺れ続けているようだった。そんなことが不意に脳裏をよぎり、涙がこぼれたのである。

素朴で飾らない使用人もまた、女主人を傷つけてしまったことに心を痛め、泣き出す有り様だった。

この思わぬ状況が落ち着くと、知り合ったばかりのようにはっとして見つめ合った。離れて暮らしてきたかと思うほど気にかけていなかったが、ようやく相手の声音をはっきり聞いた。

妙なかたちで通じ合った二人だが、擦り切れた心の弱さも、不可思議な出来事ばかりが続いて身がボロボロなもの、どちらも同じだった。その繋がりも終わりも二人にはまったく見えなかった。

女主人は食卓の上座につくと、押し黙ったままテーブルクロス of 唐草模様から正面の扉の明かり窓へと潤んだ視線を時おり這わせた。そこには鳥かごがぶら下がっており、ニッケルメッキを施した牢の中でカナリアが体を揺らすのだった。

立ったまま使用人は何やら言うとき、ぎこちなく非を詫びると慎ましく暇乞いをした。

「そんな風にしないで、ガブリエラ」とラウラ夫人が言う。「もう

終わったことだし、根に持ったちじゃないから。ここにいればいいのよ。明日は子どもを連れて行きなさい。ここを出て行ってどうしようっていうの」

「いいえ奥様、それはできません……だって……」

震える声で一息に言う。

「やっぱりできません、奥様。出て行きます」

それから一か月間、ガブリエラはアパートを探して町から町へと歩き回った。広告を読んでもらっては、教えられたとおりどんな人の家にも出向いた。「料理はできるのかしら?」、「はい奥様。ふつうの家庭料理であれば」、「それじゃあ、洗濯や子守りは?」、「はい、奥様。どちらかであれば。両方はできません」、「それならいらぬわ、贅沢なこと……」女主人がびしやりと言う。雇ってもらえるところなんてないでしょうと、不満の声が漏れる。

ほかの家も訪ねてみるが、もう間に合っていると言われたり、手問賃が知れたものだったり、あるいは子どもを同伴せず住み込むよう求められたりした。

その間、息子は母親の知り合いの家の隅に放っておかれた。貧民街の粗末な部屋は、地下牢のようにじめじめしていた。朝、仕事に出る母親を見ると、夕暮れには疲れ果てて帰って来る姿を目にした。一日働くと憐れみを誘う抜け殻になった。その知り合いは息子に苛々をぶつけることがあった。泣き出すと、平手で叩いたり、怒鳴ったりした。「ああ、このガキったら! お前のだらしない母親はずっとぶらぶらしてるんだよ。悪ガキは黙ってなさい。親がちゃ

んとさせないといけないのに……」

息子は怖がるようになると、何も頼まず、口を閉ざして空腹と喉の渴きを我慢した。衰弱した様子は見た目でもわかったが、アパルト探しを続ける母親に診療所の医者へと連れて行く暇はなかった。

くすんだ黄色い目に、マッチ棒のような足で、カエルそっくりの腹をしていた。母親は子どもが弱って病氣も悪化していることに気づきながらも、対処の仕方わからず途方に暮れた。半ば酔って帰って来る日には息子を追い払ったり、はたまた小銭を稼いできたりすることもあった。息子の出自は誰にも明かさない。またあるときには、帰って来るなり、息子にキスを浴びせて抱きしめた。そんな慌ただしい毎日を過ごしていたところ、ラウラの夫である顧問の家の前を通りかかったのである。洗濯婦のガブリエラは門の前で立ち止まって挨拶をすると、横の窓から顔を出すかつての女主人に気がついた。「おはようございます、奥様」、「おはよう、ガブリエラ。さあどうぞ」と言われて家の中に入った。もう仕事は決まったのかと訊ねるので、いいえと答えた。「そうそう、まだ料理人が見つかっていないのよ。もしよかったら……」

ガブリエラは断ろうとしたが、ラウラも引き下がらない。

このとき、二人の間には互いに助け合う思いやりのような、打ち解けた感情があった。ある午後、ラウラ夫人が町から戻って来ると、門のところにはいたガブリエラの息子はすぐさま駆けて行き、手を差し伸べて「祝福を」と言った。その振る舞いには悲しみと親しみと苦しみがにじみ出ていたので、気高い女主人は心から優しい手を差

し伸べることにした。その日、料理人のガブリエラはラウラの気持ちに沈んでいるのを察していたので、翌日になって呼び出されても驚きはしなかった。

「ねえ、ガブリエラ」

「はい、奥様」

「こっちへ来て」

ガブリエラは身なりを軽く整えると、女主人のいる食堂へ急いだ。「あなたの子はもう洗礼を受けたの？」ガブリエラが入って来るや訊ねる。

「まだですが」

「どうして？ もう四歳でしょうに」

「どうしてと言われましても。これまで機会がなくて……」

「代父はもういるの？」

「いいえ、奥様」

「分かったわ。私と顧問があなたの子に洗礼を施しましょう。いいわね？」

ガブリエラはどう返事をすればいいのか戸惑いながらも、ただたどしく感謝の言葉を伝えると、目に涙を浮かべながら竈へ戻った。

顧問は承諾すると、ふさわしい名前を慎重に調べ始めた。ウアスカル、アタリバ、グアテモジンが頭に浮かんだが、辞典を調べて、由緒ある名前を検討した末、どうにかオラシオで落ち着いた。

こうしてオラシオは成長した。定期的に治療を受けるようになり、顧問の家での生活も相応に快適だったのだが、幼少期は相変わらず

引っ込み思案で、貧弱だった。大きくなるにつれて目立つところも出てきた。まっすぐ整った前髪で、母親似の優しく物憂げな眼差しだが、特に黙って塞ぎ込んでいるときには、どこか煌めいた表情があった。一見すると親切そうな感じがするものの、不器量だった。

六歳のオラシオは陰気で口数が少なく、おどおどしていた。人や物を見て不思議に思っても、何も訊かなかった。ところが、大きな声で急に喜びを爆発させる日もあった。家の中はもちろん、庭から部屋へと走り、ふざけたり、歌を口ずさんだりして、わけもわからず嬉しそうに跳ね回っていた。

代母のラウラは感情の起伏が激しいことに目を見張り、訳を知ろうとオラシオの行動を注視するようになった。ある日、満面の笑みで歌を歌いながら遊ぶ代子の姿を見て、しばらく静かに黙って過ごしている、ラウラはピアノへ駆け寄って歌の伴奏をしてから、適当な旋律で音を合わせた。オラシオは口を閉じて床に腰を下ろし、穏やかな目で代母を見つめた。代母の指から奏でられる音色に全身の力が抜けた。ピアノが止まると、オラシオは身動きせず、その虚ろな視線は不安の中に飲み込まれていた。呆然とした様子に心を動かされた代母は胸元に引き寄せ、優しさで包み込むように抱き締めてキスをした。心に刻まれた数々の不幸は他人事ではなかったのだ。間もなく母親が亡くなった。オラシオは家の子同然の生活をしてきたが、それからはまさしくカラッサ顧問の家の子となった。ただそれでも陰気で口数の少ない性格は変わらぬどころか、むしろ塞ぎ込んでしまい、喜びをぱっと表に出すこともなくなった。

母親への想いはいまだ断ち切れず、優しく撫でられたり、抱き締められたりしたい気持ちがいまだ止まらなかった。母親のいないこの異世界で、寂しさをすっかり忘れさせてくれる人はいなかった。それに大事にはしてくれなかったが、代母に優しく撫でられることは珍しかった。

黙ったまま一言も口にせず、むすっとした表情で通学していた。休み時間に周囲が賑やかになると楽しく遊ぶ以外になかったが、すぐに後悔しては教室の隅に縮こまって俯き、顔を赤らめた。朝と同じ様子で学校から帰って来ても、外で遊んだり、いたずらをしたらず、無表情でじっと過ごした。クラスの男の子と喧嘩をしたときには先生にこっぴどく叱られ、それを知った代父からも「もうするんじゃないぞ。喧嘩はだめだからな。わかったか」と厳しく言われた。

このように代父はオラシオに対していつも必要以上に当たりが強くと、子ども扱いをし、容赦なかった。疎ましく思いながらも、ただ妻に気を遣って我慢して「ラウラの戯言のせいだ」と口にした。オラシオの母親が死んだとき、代父は児童養護施設に入れるつもりだったが、それに反対する代母はオラシオが優秀な成績で小学校を卒業したら、公立の中学校へ入学させようと夫を説得していた。

代父はすんなり受け入れたわけではなかった。オラシオへの愛情に加えて、その才能に密かな希望を抱く妻に必死に訴えられて、最後は折れたのである。

当初、代子を家に迎えるのはラウラ夫人の気まぐれに過ぎなかつ

たが、時間が経つにつれて思い入れは強く深くなっていった。ただ、表向きには遠慮がちに接した。

ラウラの中では、夫の意見や判断が気がかりで、自分の率直な思いは二の次だった。

独身時代の美しいラウラを知る者は、あまり愛情深い人だとは思わないかもしれない。結婚後も子どもはおらず、結婚生活にも夫にも夢見ていたものは何もなかった。生きていても虚しいだけ。はかなく夢は消え、叶えられたものもわずか。その反動としてごく自然に、命と魂を漠然と捉え、憐れみ、心からとはいかないながらも、すべてを愛するようになった。感情が揺れ動くことはなく、ラウラの中に積もっていたものが本能の底から溢れ出て、何もかも水浸しにした。

愛する人はいたし、過去にもいたが、どれも男たちに求めた愛の神秘性ではなかった。そうしたものに出会わねないのはわかっていた。心に傷を負ったあとに求めたのは、生き生きとした豊かな感性だった。

代子が中学校に入学したころ、恋人はラウラとの関係を絶った。ラウラは酷く傷つき、同じような男とまた付き合うには、もう若くはないと恐れていた。オラシオを公立学校に入れようと夫に懇願したのは、こうした荒んだ気持ちと無関係ではなかった。

六十歳を過ぎた顧問は相変わらず冷淡で、自分本位で他人を寄せ付けず、高いと思えばその地位をいつも夢見ていた。結婚したのも世間体を気にしてのことだ。地位のある男が、妻に死なれたまま独

り身でいるわけにはいかなかった。周囲の目が向けられたところから、女は望みどおり受け入れ、男は都合よく利用したに過ぎない。それから、新聞の為替相場のページを読み込み、朝には授業の講義ノートに目を通した。それは教員になりたての三十年ほど前にまとめた自作のノート。前途有望の二十五歳という青年時代のものだ。

毎朝、オラシオは学校へ行く際、揺り椅子に腰掛けて新聞を読み耽る代父を見て、「祝福を」と挨拶をした。代父は「神のご加護があらんことを」と返すが、それは使用人にサンダルを持って来させるときと同じ口調で、背もたれに寄りかかったまま振り向くことさえなかった。

代母は大抵まだ横になっているので、オラシオは挨拶もキスもできず、上着を優しく整えてもらえないまま、学校という耐えがたいところへと行った。通学途中の路面電車では車両の隅に押し込まれながら静かにやり過すが、丸々と太った女性のシルクの服を自分の上着が擦ってしまったり、教科書がどこかの瘦せかけた陸軍大尉のズボンに触れたりしないかと不安で仕方なかった。通学中は空想に耽って、魂がふらふらと彷徨う。馬に乗った将校が通りかかると、イギリス人、ドイツ人、アメリカ人との戦争で勝利を収めて帰還した将軍のような出で立ちでオウヴェイドール通りに入り、見たこともない喝采を浴びるので。親密な愛に満たされず思索に耽るまだ幼い頭の中で、想像力が躍動し、さも現実のように浮かぶ幻影を次々に作り出していた。

オラシオにとって、授業はまさしく退屈な時間でしかなかった。

怠け者ではなく、勉強も少しはしていたが、教師たちの口から語られるある意味で崇高かつ輝かしい知の素晴らしさは、煤けてばらばらな感じがした。点と点をうまく結びつけられず、何もかもが堅苦しく、陰気で、野蛮なものに見えた。定理には未開の王のような横暴さがあつた。些末な規則や例外ばかりの文法は奇抜か意味不明で、何の役にも立たなかつた。

この世界は過酷で、身を切るようなわだかまりに満ち、三数法が幅を利かせているようだった。その秘密と応用は温厚な者と不愛想な者のいる支配者層が牛耳っていたが、無気力な老人ばかりだった。試験では誰もオラシオに手を差し伸べず、気にかける者もいなかったが、まずまずの成績でいつも合格した。

学校から帰つて来ると、代母のところへ行つて授業のことを話した。ほかに、その日の何気ない出来事や試験の点数、級友たちのいたずらを聞かせた。

ある日の午後、いつものように話し掛けようとすると、ラウラ夫人が来客の応対をしていた。祝福をと言つて夫人のもとへ寄つてきた少年を見た女は首を傾げる。「この男の子は誰?」、「私の代子よ」とラウラ夫人。「代子? ああ、そうだったわね。ガブリエラの息子……」

オラシオは黙つたまま体をこわばらせていると、大声で泣き始めた。

そうしてオラシオが奥へ下がると、訪問客が代母に向かって言う。「育て方が良くないのよ。もっと愛情を込めてあげないと。神経質

にさせてるじゃない」

「いいのよ。立派になるかもしれないんだから」

代父母の家で暮らすオラシオの毎日はこのように過ぎていった。

日曜日になると、ときには一人で、ときには友だちと浜辺を歩いたり、路面電車に乗ったり、庭を散策したりした。ジャルジン・ボタニコ地区⁽⁶⁾がお気に入りだった。オラシオは親友のサルヴァートルとベンチに座つて、ふだんの勉強のことを話したり、教師たちの悪口を言つたりした。やがて会話が途切れると、二人はしばらく黙り込んだ。オラシオは物、木々、空、雲がゆらゆら浮かぶ詩情に身をゆだね、鋭くそびえる険しい山々をうっとり眺め、突き出た山頂の様子を優しく見つめていた。それから、鳥のさえずりに耳を傾けながら、知性が顔を出して邪魔しないよう、心の中を空っぽにして物思いに耽つた。しまいには、現実の中に溶けて蒸発したような気分になった。人間の形をなくして、濃緑の森の中や山の斜面を流れるきらりと光る水の中に飲み込まれた感じだった。こんな風に、苦しんだり、考え込んだり、痛みを感じたりすることもなく、微粒子のようにばらばらになって自然に溶け込む自分はどんなに気持ちの良いことか。不確かな世界に入り込むと、すべて消えてしまうことに怯えてふと我に返り、焦つて自分の願いと向き合つた。「サルヴァートルはさあ、英語とフランス語のどっちが好き?」、「僕はフランス語だけど、そっちは?」、「英語だよ」、「どうして?」、「だって、できる人があまりいないし」

秘密にしていたことが口をついて出てしまった。サルヴァートル

に自惚れていると思われるのが怖かった。元気の源はそんな感情ではなく、自分らしく振る舞って個性を強くしたいという思いだった。自分の置かれた環境のせいで、ほとんど失くしたものだ。友だちはオラシオの心の中に踏み込まずに無邪気に訊ねる。「オラシオはさあ、サン・ジョアン祭に行ったことある？」、「いいや一度も」、「行ってみたい？」、「うん、でもどこ？」、「島に叔父さんの家があるんだ」

代母は賛成した。祭りは初めて見る光景だった。目の前に見たことのない世界が広がっていた。浜辺のあの長い曲線。オラシオの心にどんな新しい展望が開けていたのだろうか。波の飛沫と果てしない水平線に溶け込みつつあった。

夜になると部屋を出た。お祭り騒ぎも、激しい踊りも、ただただ無表情なのが理解できず、まるで罰のようだった。外のベンチに座り、ひっそりと隠れるように人目を避けて一人で夜を楽しんでいると、日々の喧騒の中に紛れ込んだ気がした。その暗い隅から見ると、ぼんやりした光の中にどっぴり浸されていた。暗闇の空には淡い星の光。向かい側の町にはきらきら反射する光。その先は誓いのかがり火の、空に浮かぶ風船の、ぱつと輝く花火の、あちこちに灯る松明の光。それらは輝き続ける儂い光たち。淡い光と強い光。そうして集まった光は、謎に包まれた夜の闇を消し飛ばそうと懸命に努力しているようだった。

照らされた霧の中で、木という木が亡霊のように浮かんでいた。人間と星が闇を明るく照らそうと懸命なのに、海のざわめきには悲

しみらしきものがあつた。あのとき、どの魂にも、周囲の謎を解こうという強い願いがあつた。そして、幻想は「未知のもの」や「目に見えないもの」との対話を図ろうとしていた。小さな農園の暗い隅を人々は通り過ぎて行つた。井戸へ行き闇を覗き込むのは一年を過ごそうとの合図だ。ヘンルーダの枝を巡って悪魔と争う。割れた卵を入れたコップを窓辺に置くのは、翌日、夜露が「未来」からのメッセージを持って来るようにするためだ。

オラシオは予感と魔法のざわめきに引きずられるのを感じながら、どれほど曖昧や謎に取り囲まれ、浸されているのかにはっとした。巨大で不気味な恐怖の波が少年の感情を覆つた。

それからの日々は苦悩の連続だった。精神が彼の体を激しく揺さぶつた。勉強に励もうと教科書を読んでもさっぱりで、何も覚えられなかつた。網の目を抜けてこぼれ落ちるような理解力だった。また始めに戻つては、読むことを繰り返し、苛々しながらも必死にページをめくつた。それはさながら、ページの下に慈悲と歓喜に満ちたもう一つの世界を見つけようとする姿だった。知識も思想もなかなか身につかず教科書を放り出し、縮こまって存在を消したいとは以前から思つていたが、科学と芸術を丸ごと吸収したいという強い望みも抱いていた。感情は移り変わるもので、動揺は取るに足りない。解決の糸口も出口も見つからない。物の見方がばらばらに崩れて感覚も乱れ、オラシオはどうにもできずに心身の健康を削られるばかりだった。体力は落ち、疲れやすくなつた。寝ても疲れが取れずに朝を迎えたり、朝まで目が冴えて疲れたまま寝たりした。

誰に対するわけでもなく、ただただ昔々して過ごしていた。

ある朝、食堂に入ると、いつもと変わらず新聞を読んでいる代父に会った。

「オラシオ。ゲデスの家に行つて、直してもらつた服を持って来てくれないか」

「ちがう人に頼めば」

「何だと？」

「取りに行くもんか」

「この恩知らずが！ やっぱりこうなつたか……」

オラシオは臆病な自分の殻を破つた言動に驚いた。

あの恥知らずな言動と驚くほどのしつけの悪さは、どこから来たのか。誰かがそつと息を吹きかけるように、ただ口をついて出たものだったのか。

代母が間に入つてその場を鎮めた。女は心の機微を感じ取りやすく、オラシオの気持ちもわかつた。身振り手振りや視線、当たり障りのない言葉を掛けて代子を励ました。その行為がどんな意味を持つのか忘れてしまつていたが、ふいに荒々しくなつたオラシオの奇妙な行動ではつきりとした。一人ぼつんと生きる苦しみ、衝動的な感情の吐露、寄り添ってもらえない悲しみが見て取れたのだ。心の中にある何でも断ち切ろうとする考えと、それが感情と行動を極端な方向へと導くことを。

代母は優しい言葉を掛けたり、たしなめたり、諭したり、幸運と栄光と名声があることを伝えた。

オラシオは肩を落としたまま学校へ行つたが、仲間外れにされ、自分が汚らわしいという妙な感覚に捉われていた。恩知らずの、まさに怪物だった。代父母は教育からしつてまで何もかも与えてくれた。あれはついうっかり、思わず出たもの。よく考えもせず代父に返事をしてしまつたのだ。いずれにしても、あの言葉はオラシオの口から出た、オラシオの発言には違ひなかつた。頭を使わずに心の中から出たのだとしたら、根っからの悪だと認めるほかない。

二時間目に早退をした。気分が悪く、頭痛がして、煙の舞う松明が顔の前をかすめたような気がした。

「オラシオ、もう帰つてきたの」見かけた代母が訊ねる。

「気分が悪くて」

そう言つて部屋に向かうと、代母も後を追つた。部屋の中に入ると、服を脱ぎ切らないままベッドに身を投げ出した。

「どうしたの、オラシオ」

「頭が痛くて……暑い……」

代母は脈拍を測つて、手の甲を額に当てた。大したことはないし、代父も怒つてないから落ち着いてと、慰めの言葉をかけた。

横になつてゐる少年の目は半開きで、何も聞こえていないようだった。寝返りを打つたかと思えば、手を顔に持つていき、息を切らせてじたばたしていた。一瞬落ち着いたのか、体を起こして枕の上に立ち上がると、目元に手を添えた。遠くを眺めようとする人の仕草に、代母は驚いた。

「オラシオ、オラシオつたら！」

「ぼくは引き裂かれて……血は出ない……」

「オラシオ、オラシオ、ねえ！」

「晴れてる……日差しがきつい……燃えてる……大きな木が……象も……」

「オラシオ、どうしたの、聞いているの？ ほら、あなたの代母よ」

「黒人たち……かがり火……身をよじる人……ああ、どういうこと。僕の体が踊って……」

「オラシオ！ ジェノヴェヴァ、花の水を持って来て。急いで医者を呼んで来て。早く！」

「もう同じじゃない……別の……場所に……変わったんだ……白い小さな家……牛車……クルミ……イチジク……ハンカチ……」

「落ち着いてったら！」

「ああ、大変だ！ 二人が喧嘩を……」

ほどなくして、オラシオはぐったりした。最後の方はまともな言葉になっけいなかった。落ち着いたようだ。医者がやって来て熱を測る。診察をして堂々と告げる。

「奥様、もう心配はご無用です。熱せん妄にすぎません。下剤のあとにカプセルを飲ませれば、すぐに良くなりますよ」

注

- (1) 翻訳の底本には STEEN, Edla van (direção); BARBOSA, Francisco de Assis (seleção). *Melhores contos de Lima Barreto*. Saed, São Paulo: Global, 2002. を使用した。
- (2) 詳しくは、武田千香「語り始めたアフロブラジル作家たち——原点を見つめなおして——」『総合文化研究』第二十五号、東京外国語大学総合文化研究所、二〇二二年、十九―四十四頁を参照のこと。
- (3) イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール（武田千香・江口佳子訳）『曲がった鋤』水声社、二〇二三年。
- (4) アントニオ・ノローニャ・サントス (Antônio Noronha Santos; 1883-1956) は、ブラジルのジャーナリストでリマ・バレットの親友だった人物。
- (5) ジャン＝マリー・ギュイヨー (Jean-Marie Guyau; 1854-1888) は、フランスの哲学者で詩人。
- (6) リオデジャネイロ市の南部地区 (Zona Sul) に位置する。その名のとおり植物園 (jardim botânico) がある。
- (7) アフロブラジル宗教の一つ「ウンバンダ」で、頭痛を和らげたり、緊張をほぐしたりする効果があるとされる。

参考文献

- BARBOSA, Francisco de Assis. *A vida de Lima Barreto: 1881–1922*. 11ª ed., Belo Horizonte: Autêntica Editora, 2017.
- FIGUEIREDO, Carmem Lúcia Negreiros de. Benevolência trágica: o conto de uma casa brasileira. In: *Convergência Lastada*. Rio de Janeiro, v.32, n.45, pp.99–121, jan-jun 20.
- PRADO, Antonio Arnoni. Introdução. In: BARRETO, Lima: edição preparada por Antonio.
- Arnoni Prado. *Histórias e sonhos*. São Paulo: WMF Martins Fontes, 2008, pp. IX-XXXIX.
- SCHWARCZ, Lília Moritz. Introdução – Lima Barreto: termômetro nervoso de uma frágil República. In: LIMA BARRETO. *Contos completos: organização e introdução Lília Moritz Schwarcz*. São Paulo: Companhia das Letras, 2010, pp.15–53.

“O filho da Gabriela”, de Lima Barreto

Masayuki Kibe

〈Sumário〉

Apesar de ser menos famosa do que os contos “Clara dos Anjos” e “A nova Califórnia”, traduzidos em edições anteriores desta revista, a obra “O filho da Gabriela”, publicada em 1906 pelo escritor brasileiro Lima Barreto (1881–1922), é de uma grande importância para se conhecer melhor a sociedade brasileira – ainda que no seu lado negativo – do início do século XX.

Recentemente na literatura brasileira têm sido destacados escritores afro-brasileiros, como Itamar Vieira Júnior (1979-), cujos romances focalizam a vida crucial dos negros que são obrigados a trabalhar como escravos. No entanto, mais de cem anos antes, Lima Barreto, ele próprio filho de descendentes de escravos, já tinha tratado deste mesmo tema relacionado com a sua vida pessoal não só em contos, mas também em romances e crônicas.

No conto “O filho da Gabriela” são descritas as questões do serviço doméstico, a tensão entre a casa e a rua, entre outras, através da história de uma mãe negra e seu filho. Os leitores devem reconhecer que a vida deles não mudou muito e dificilmente mudará no futuro.